

<福島県知事賞>

## ぼくにとって身近な税金

会津若松ザベリオ学園中学校

3年 遠藤 宗一郎

ぼくの家近くに病院がある。会津若松市では一番大きな病院で、救急車が毎日家の近くを通っていく。救急車を利用する急病人のほとんどは高齢者であると聞いた。

高齢者の人口が増加したことにより、社会保障費が増え国の財源を圧迫しているとニュースで報じられている。ぼくは以前から国の財源である税金の使われ方が、不均等であると感じていた。自分達のような核家族にとって税金の恩恵を受けているという実感は、普段あまりなかった。

そんなぼくの家にも、昨年9月赤ちゃんが生まれた。ぼくと年が14もはなれており、とてもかわいく感じた。家の近くの病院で出産したため、ほぼ毎日のようにお見まいに行った。赤ちゃんが生まれた病棟は、毎日ほぼ満床だった。そのため母も1週間程度で退院した。自宅へ戻ってからも母は出産したばかりで体調が完全でないため、ぼくも家事や赤ちゃんの入浴を手伝った。赤ちゃんは首もすわっていないため、とても注意して手伝った。赤ちゃん一人を成長させるのにすごく手間がかかるということを実感した。同時に自分もこのくらい手間をかけてもらって今があるんだなあと思った。残暑もあって母の体調が完全に戻るのに、1ヶ月くらいかかった。

ある日父が書類を書いていた。父の話では出産は病気ではないので保険が使えないためかかったお金はすべて自分達で負担するしかない。しかし国の制度で子供一人あたり42万円ももらうことができる、出産一時金という仕組みがあると聞いた。またふだん働いている母親が妊娠・出産で働けない間生活を支える仕組みの出産手当金もあると聞いた。

それらの制度は、ぼくが赤ちゃんだった時もあったらしい。

そのことを聞いた時、国の財源の使われ方が不均等と感じていたぼくの見方は変わった。税金は、社会的に弱い立場の人に手厚くなるような仕組みになっていて、そのことで世の中の不公平さや格差をなくすことに役立っているのだということがわかった。税金の恩恵を受ける今回のようなことが身近にあまりなかったが、自分も税金の力で助けられてここまで大きくなったのだと感じた。

赤ちゃんはある程度大きくなっても、健診を受けたり、予防接種の注射を受けなくてはならない。幸いぼくの住んでいる会津若松市は赤ちゃんからぼくのような中学生まで、医療費は無料である。お金では買えない健康というものを根幹から支えてくれる税金はとても大切なものだ。

今赤ちゃんはすくすく大きくなって、ぼくの方まで笑顔で歩いてきてくれるようになった。赤ちゃんの笑顔を見るたびに、税金が果たしてくれた役割を感じている。